

# 論壇

## 20〜30年周期で転換点

グローバル経済は20年から30年の周期で大きな変化を遂げている。1930年代には、世界大恐慌の中で主要国は激しい保護政策を取って輸入を抑えた。ブロック経済化が進んだ。それが世界経済をさらに厳しい状況に追い込み、第2次世界大戦の大きな原因にもなった。

こうした反省から、第2次世界大戦後の40年代後半、戦後の世界経済体制が確立した。ブレトン・ウッズ体制と呼ばれるものだ。主要国はIMF（国際通貨基金）の下で通貨の固定相場制を維持し、貿易については先進国だけの関税引き下げが続いた。その制度が壊

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

れたのが70年代だ。米国のニクソン大統領による金とドルの交換の停止（ニクソンショック）をきっかけに、世界は変動レート制に突入した。70年代の2度の石油ショックによる大インフレも経験した。

次の大きな転換点は、2001年であるかもしれない。この年の12月には、中国がWTO（世界貿易

に利用可能な国にすぎなかったのだ。

しかしそれから20年近くの間にグローバル経済が大きく変貌した。中国は大きく成長して、そのGDPは日本を追い抜き、今の勢いでいけば米国をも追い抜く。日本も含めて多くの国の産業は中国への輸出に大きく依存している。

AI（人工知能）やEV（電気自動車）

## 世界経済の変遷

易機関）への加盟が認められた。グローバル経済のメインプレーヤーとして認められたのだ。その時点で中国経済は大きな存在ではなかった。GDPは日本に比べてまだ非常に小さな水準であったし、主たる輸出品も衣料品などの軽工業が大きかった。主要国からみれば、中国は低賃金の労働力が潤沢

易機関）への加盟が認められた。グローバル経済のメインプレーヤーとして認められたのだ。その時点で中国経済は大きな存在ではなかった。GDPは日本に比べてまだ非常に小さな水準であったし、主たる輸出品も衣料品などの軽工業が大きかった。主要国からみれば、中国は低賃金の労働力が潤沢

動車）の分野では、世界をリードするようになるだろうとしている。チャイナマネーは世界中に投資され、途上国では中国支援のインフラプロジェクトが進んでいる。

後には中国の存在はますます大きなものになっていくだろう。ただ、「これまでの20年と同じ流れ」ということに、大きな疑問符が付く。それが現在の状況だ。

### 米中貿易戦争の行く末

米中で続いている貿易戦争は、それほど大きな動きであるのだ。貿易収支を巡る関税引き上げのことではない。ファーウェイへの扱いに象徴される経済分野での米中の覇権争い、そして安全保障に

まで関わる米中間の経済戦争である。米国では、保守からリベラルまで、幅広い層で中国型の経済運営に批判が広がっている。自国企業にテコ入れして重点産業を育てる、中国でビジネスを行う企業には技術を提供することを要求する、自由な経済運営よりも共産党一党独裁という政治を優先

する。こうした中国の体制と米国が正面からぶつかろうとしている。もしこの貿易戦争の流れが続くとしたら、この20年間私たちが見てきたグローバル化の流れは、大きく方向転換するのかもしれない。米国と中国の間に経済的な断絶が起きた時、中国はそれでも順調な成長を続けることができるのだろうか。その時、日本の産業はどのような転換を求められるのだろうか。

現時点では、こうした問いへの明確な答えを出すことは不可能だ。現在の動きもあまりに不透明である。ただ、20年から30年に一度はグローバル経済が大きな転換をしてきたことは事実である。今がそうした大きな転換の時期なのかどうかという視点で、米中貿易戦争の動きを追う必要がある。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。